

2014年度湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

JOINT CONFERENCE ICMC/SMC 2014 での作品発表

文・写真：環境情報学部3年 岸 優美子

1.活動の概要

- 活動日程：2014年9月15日(会議開催期間は同9月14日～9月20日)
- 開催場所：ギリシャ・アテネ(Onassis Cultural Center)
- 参加者：環境情報学部3年 岸 優美子

2.会議の概要

JOINT CONFERENCE ICMC/SMC 2014 は、1974年に始まったコンピュータ音楽に関する会議である ICMC(International Computer Music Conference)の第40回大会と、2004年に始まった SMC(Sound & Music Computing conference)の第11回大会の合同開催の会議である。ギリシャの首都アテネに位置する複数の会場を用いて一週間の会議が開かれ、コンピュータ音楽に関する論文発表、作品展示、コンサートなどが行われた。

3.活動の目的

本会議は世界最古にして最大のコンピュータ音楽会議であるため、そこでの作品展示を通して自らの音楽作品に対する反応を多く得ること、また会議に参加する世界中の作曲家と交流し新しい表現に触れることにより、これからの音楽表現の形について知識を深め、自らの次なる表現につなげていくことを目的としている。特に今回は2014年制作の楽曲 "Miyama_Kamakura" を会期中に開かれるコンサートで発表することにより、多様な研究軸を持つ人々から直接反応を得ることを期待して参加を決定した。

4.活動の成果

報告者の参加した Evening Concert C2.3 (Spatial music and performance) は Onassis Cultural Center 内のホールにて開催された。客席中央に設けられた音響ブースにて楽曲を流し、リアルタイムで音の空間配置を操作する形式で発表が行われた。楽曲発表時間は9分弱であったが、事前のリハーサルや発表前後の他の演奏者との交流では、コンピュータ音楽を学術的に学び、それを指導する立場にある方々がどのような視点を持って楽曲制作に取り組んでいるのか

について直にお話をうかがう事ができた。既存のコンピュータ音楽の枠に囚われず、映像や生楽器とのコラボレーションにより新しい音楽の形を追究していたり、人間の動きや周囲の環境と同期して有機的な音楽が生まれるインスタレーション作品を制作していたりと、規模の大きい学会であるからこそ触れることのできる新しい形の表現を多く目にする事ができた。

また、報告者の楽曲は大会予稿集(proceedings)に付属するディスクにも収録され、会議出席者に配布された。



(写真)リハーサルの様子

5. 今後の課題

今回の会議参加を通して、コンピュータ音楽を学術的に研究することと、広く社会に受け入れられる芸術表現を両立することの難しさを痛感した。もちろん音響に関する研究そのものも非常に学術的に意義のあることだが、研究成果である音楽作品に多くの人に触れてもらうためには、そのアウトプットに映像やインスタレーションのシステムを追加したり、新しい体験を誘発する要素を付与したりすることがとても大切であることを改めて感じた。ただ前衛的な、小難しい音の並びを良しとするのではなく、今までに無い表現手法を用いつつも、その結果によって人々がどのような体験をし得るのかを想像しながら制作を行うことが、今後の自らの制作活動にとって必要なことであると分かった。また、そのためには自分の作品を積極的に公開する場を持ち、常に客観的な評価に晒されながら試行錯誤を重ねることも重要であると感じている。

6. 謝辞

本研究発表にあたって「研究助成基金」により渡航費をご支援いただいた湘南藤沢学会の皆様、厚く御礼申し上げます。